

個別教育計画と授業づくり

～筑波大学附属大塚特別支援学校60周年に寄せて～

高橋幸子（平成9年度～平成27年度在職）
（國學院大學人間開発学部）

『プールでさんすう』という单元名を聞いて、皆さんはどんな授業を思い浮かべますか？私が大塚に着任して3年目に小学部で取り組んだ研究授業です。折しも日本で「IEP」の導入が叫ばれ、全国で取り組まれ始めた時期でした。大塚でも「個別教育計画」の書式について議論し、各学部がそれぞれの発達段階や学部の教育課程の特色を生かした「個別教育計画」を作成しました。その時に掲げたスローガン^{注1}に「個別教育計画を絵に描いた餅にしない」というのがありました。計画は教育実践に取り組むためのものであって作ることが目的ではないという思いを共有し、「個別教育計画」を授業に活かすことを目指して作った授業が『プールでさんすう』だったのです。

水遊びの季節、クラスみんなが大好きなプールでの活動に、個別の課題を踏まえて学習活動を盛り込みました。大小のプールを用意し雨樋からスチレンボードで作った文字カードや形カード、カラーボールなどを流し、プールでカードマッチングや色分け、数数えを行う・・・というような授業^{注2}でした。もちろん、子どもたちは大いに水遊びを楽しみました。案の定、参観した先生方からはやや響きを買ひ、今思い出しても、思わず苦笑してしまいます。その後もクラスベースで『ワイワイタウンに行こう』など、「個のニーズから作る授業」を追究し、それがやがて課題別グループ学習に発展していったと認識しています。「個別教育計画」にあげられた「個のニーズ」をとらえ「文脈」や「必然性」を大切にして授業づくりを行う姿勢は、その後も大塚の教育実践として脈々と引き継がれていると思います。

『プールでさんすう』の頃の大塚での取組を振り返ると、無謀とも思える授業づくりのチャレンジを温かく見つめ応援して下さった保護者の皆様のお顔が次々に目に浮かびます。時には「この活動にはどういう意味があるのですか？」という厳しい問いかけをいただき、その都度「個別教育計画」と照らし合わせ、この授業が「誰のために」「何のために」行われるのかを問い直すことができました。授業づくりの審判者はなんといっても子どもたちです。容赦のないだめだしがあった時は申し訳なさで落ち込み、集中して満面の笑みを浮かべて活動している姿を見せてくれた時には授業づくりの醍醐味をたっぷり味わわせてもらいました。これらの体験を大学生に話すと、学生から「授業を考えるのが楽しみになった」という声が上がります。次世代の教員を育てるという職務に携わる今、私が大塚でどれだけ多くのことを学ばせていただいたか、改めて痛感する日々です。この大塚での学びは、大学の先生の助言や共同研究の機会がふんだんにある附属ならではの利点とともに、高い志を持った同僚との切磋琢磨の中で得られたものであることはいまでもありません。

近年、好きな言葉を尋ねられると、私は迷わず「縁」と答えます。あの日、初めて校門をくぐったときから始まった大塚とのご縁。子どもたち、保護者の皆さん、そして同僚。大塚の歴史のほんの一時期ではありますが、出会いがあり、同じ場で同じ時を刻んだご縁。大切な大切な宝物です。

「世界最高水準の知的障害教育」をめざし、大塚が大塚らしく、ますます発展されることを切に願い、いつも応援しています。60周年おめでとうございます！

注1：記憶には刻まれています、スローガンとしてどこかに正式に掲げたかどうか定かではありません。

注2：研究紀要第44集に詳しい説明があります。設定された学習活動は10を超えています